ほない歴史通信

第１０８号
2023(令和５).9.1

懐かしき昭和の大子

大子町栄町のミヅホ写真館において、このほど、大子町内で昭和三十年代から五十年代に撮影されたと思われる写真が多数発見された。これらの写真は、ミヅホ写真館の創業者である故森山道和氏（一九二九～二〇一二）が撮影したもので、「要保存」と書かれた箱に仕舞われていたため、廃棄こそされなかったが、ご家族の中でも長らくその存在が忘れられていたという。

ご家族から写真発見のご一報をいただき、私が拝見したところ、いずれも昭和の大子を記録した極めて貴重な写真であることがわかった。私が本誌上で写真をご紹介したいと申し出たところ、ご家族は撮影者も喜ぶとご快諾くださった。

そこで、今号から、「懐かしき昭和の大子」と題し、故森山道和氏が撮影された写真を一枚ずつ解説を付してご紹介する。

（大金祐介）

大子町歴史資料調査研究会では、明治・大正・昭和期の写真や絵葉書を探しております。お見せいただける方は、大子町教育委員会事務局生涯学習担当（〇二九五-七二-一一四八）までご連絡ください。

〇常陸大子駅前の街並みと大子デパート（昭和四十年代前半）

大子デパートは、鉄筋コンクリート造り三階建て一部四階建てで、屋上には「大子ゆうえんち」があり、亀宗大子店（衣料品店）が入居する、当時、大子町最大の店舗だった。その後、昭和四十六年に大子町農協が買収し、アイマート（食品スーパー）となった。

水戸ホーリーホックホームタウン～大子町

赤津康明

令和四年(二〇二二)九月、大子町はサッカーＪ２水戸ホーリーホックから県北地域六市町への呼びかけに賛同して、同クラブのホームタウンに加わった。

ホームタウンとは、Ｊリーグの各クラブが地域と一体となってスポーツの普及や振興に努めるものであり、水戸ホーリーホックの小島耕社長のコメントには、「夢と感動と一体感の共有に向けて地域と共に発展」というビジョンが示されている。

これを受けて、今年一月に松田隼風(まつだはやて)選手と唐山翔自(とうやましょうじ)選手の二名が、大子町ＰＲ大使に就任した。松田選手は、北海道出身の十九歳。リズミカルなドリブルと精度の高いキックが得意のサイドバックで、国体少年男子で優勝の実績を持つ。ひとつ年上の唐山選手は大阪出身のフォワードで、十五歳から十八歳の各世代で日本代表に選抜されており、ゴール感覚に優れた選手である。

ＰＲ大使の活動として、四月二十四日に松田選手の講演会が開催され、会場となった町立中央公民館は、大子サッカースポーツ少年団や大子中学校サッカー部など多くの参加者で賑わった。人前で話すのは苦手と言っていた松田選手ではあったが、講演では、父親の指導で目標回数を達成するまで延々とリフティングを続けた少年時代のエピソードや、出身地の函館を離れてから水戸ホーリーホックに入団するまでの経験談を丁寧に語り、子どもたちは熱心に聴き入っていた。また、実演されたボールさばきの鮮やかさに、大きな歓声が上がった。

一方、唐山選手は、五月十日に大子町役場で行われたサイン会で多くのファンや子どもたちと交流し、五月十三日にケーズデンキスタジアム水戸で行われた「大子町の日」のＰＲイベントでは来場者に町の魅力を広くアピールしてくれた。

その後、松田選手は、Ｕ２０ワールドカップの日本代表に選抜され、アルゼンチンで行われた試合に出場した。そして六月には、欧州を代表するリーグの一つであるドイツ・ブンデスリーガへの期限付き移籍が発表された。移籍先は、ドイツ北部に拠点を置くハノーファー９６で、約六十年前からリーグに在籍する伝統あるチームである。

サッカー史における日本とドイツの縁は深く、特に昭和三十五年(一九六〇)に日本サッカー協会初の外国人コーチとしてドイツから招かれたデットマール・クラマー氏は、四年後に東京オリンピックを控えた日本代表チームを指導するとともに、Ｊリーグの前身にあたる日本サッカーリーグの創設に尽力し、「日本サッカーの父」と呼ばれている。

昭和五十二年に、海外移籍選手第一号となった奥寺康彦氏が所属したのも、ブンデスリーガの１ＦＣケルンであり、その後も、香川真司氏や長谷部誠氏、内田篤人氏など、多くの日本人選手がドイツに渡り、日本代表としても活躍した。

松田選手は、今回の移籍により、七月一日付けで大子町ＰＲ大使改め大子町公式ＳＮＳアンバサダーに就任した。これを機に、ドイツの地から大子町の魅力を広く世界に発信してもらいたい。また、七月で期限付き移籍期間が終了した唐山選手には、復帰したガンバ大阪での活躍を祈るとともに、これからも大子町にエールを送って欲しい。

水戸ホーリーホックは、今年でＪリーグ加盟二十三年目を迎えた。ホームタウンは県内十五市町村となり、悲願であるＪ１昇格へ大きな力となるだろう。そして近い将来、日本のトップチームとなる日まで、私も全力で応援していきたい。

（大子町副町長）

この町で見つけた「やりたいこと」

飯田萌美

今となっては「地元の方ですか」と言ってもらえる私ですが、実は移住者です。

水戸市出身で、成田市から大子町に移住しました。

大学生だった二十歳の頃に「趣味の絵を描くことを十年間好きでいられたら、いつか仕事にしよう。」と決意しましたが、テレビで地域おこし協力隊のことを知り、その活動を見て勇気をもらったことで、三十歳を目前にして大子町の地域おこし協力隊に応募し、着任しました。大子町を選んだ理由は、前職で農家の方と仕事をした経験から、地域の農家と仕事がしたい、そして、私が絵を描くことで農家の仕事を少しでも応援したいと思ったからです。協力隊になった私に与えられたミッションは、大子おやき学校と奥久慈茶の里公園の広報と販売促進活動でしたが、農家からの依頼で商品のパッケージデザインを制作することもありました。

大子町への定住を意識したのは、協力隊の任期二年目のことでした。アートイベントやマルシェにボランティアスタッフとして参加する中で、「こんなに楽しい時間を日常的に体感できたらいいのに」「大子町のお土産になる雑貨を売っているお店があったらいいのに」と思ったことがきっかけです。そこから、「大子町も観光地、旅先に雑貨店があったらもっと楽しくなりそう」「いっそのこと私が雑貨店を開こう」と、妄想が炸裂し、遂に協力隊卒業後に大子町に定住し、雑貨店を開くことを決意しました。

店のコンセプトは、「大子町のアートに触れる」「大子町に縁のある作家の作品を販売する」「ここでしか買えない大子町のお土産を作り、販売する」という何とも尖ったものにしました。場所は、常陸大子駅前の中心商店街の本町通り、旧堀江歯科の二階にしました。無骨なコンクリート造りに惹かれたのが理由です。店名は、「memeguru（めめぐる）」にしました。大子弁で「芽が出る」という意味です。開店準備を手伝ってくれた協力隊のＯＧに、大子町の方にも馴染みのある言葉を店名にと、提案してもらいました。店は無骨なコンクリート造り、店名の柔らかさと店の造りにギャップがあって気に入りました。店名を決めた時に、大子の山に柔らかな新芽が芽吹く春にオープンしようと決めました。私の誕生日がちょうど四月十五日だったので、令和三年三月二十七日にプレオープンの後、同年四月十五日に正式にオープンしました。

コロナ禍でオープンしたこともあり、早くも店を継続することの難しさ、大切さを実感することになりましたが、商店街の先輩方が気にかけて様子を見に来てくれたり、アドバイスをくれたりしました。感謝の連続でした。その後、飲食の営業許可を取り、月に数回、一階で飲食店を始めました。最近は、大子町に移住し、起業した同世代の仲間ができ、連携してイベントを企画したり、互いの店とコラボしたり、新しいことに挑戦できるようになりました。

今、私は、昼間は雑貨店、時に飲食店、夜はデザインの仕事をしています。未熟者ですが、これからも、観光客や大子町の若者に、この町の良さを私なりの方法で伝え続け、暮らしていきたいと思います。

（大子町大子在住）

memeguru
所在地：大子町大子 660-5
営業日：金、土、日、月曜日
営業時間：11:00～17:00

郷医皆吉氏について（上）

野内厚志

江戸時代に大子村で代々医家として続いた皆吉氏は、喜連川藩足利氏の家臣相馬氏と深いつながりがある。皆吉氏の出自は、千葉氏一族から分かれて下総国相馬御厨を支配した相馬氏の分流と伝わる。あるいは陰陽師の惟宗氏の一流で摂家将軍の鎌倉下向に従って来た紀氏が祖だとも言われる。その本貫は、現在の千葉県市川市皆吉郷の地とされ、皆吉氏の名は、歴史書『吾妻鏡』に引付奉行人として残る。しかし鎌倉幕府滅亡後は、本貫を離れ古河公方足利氏に臣属しつつ、戦国時代を生き抜いたと思われている。

相馬氏は、鎌倉時代に本貫の下総国と陸奥国小高（現南相馬市）の二流に分かれた。下総相馬氏は室町時代・戦国時代を通して次第に衰退し古河公方足利氏に臣属したが、陸奥相馬氏は戦国大名から近世大名へと脱皮して六万石の石高で明治を迎えている。

足利氏の古河公方家は徳川時代に喜連川藩主となり、下総相馬氏はその重臣として連なるが皆吉氏の名を確認できる資料はない。寛永の頃に家が絶えたためと思われる。後に相馬氏の二男が「（外曽祖父皆吉修理亮で絶えた）皆吉氏を再興し医師として大子村に移住した」（『相馬家文書』）との記録を除き、皆吉の名は埋もれている。

相馬権右衛門尉玄蕃胤晴の二男孫五郎胤明が、祖母生家の皆吉姓を名乗り幽軒と称して大子の地に移り、医家として定住したのは宝永年間（一七〇四～一〇）頃と思われる。医師となった訳や他藩領である大子村に移住した訳は伝わっていないが、以来皆吉氏は明治時代前期まで七代百七十年にわたり保内郷の医師として地域医療に携わりつつ、喜連川藩との関係を続けた。皆吉幽軒胤明。元文三年（一七三八）没。行年七十七。

二代立碩勝富は浅川村長山三右衛門家からの養子。幽軒の弟子であったと思われる。寛保二年（一七四二）没。

三代立胆胤長　立碩勝富の子。天明八年（一七八八）没。

四代立碩胤忠（胤叙）　水戸藩医で漢方医学史上高名な原南陽（一七五三～一八二〇）に医術を学び、南陽の愛弟子であった。また幕末水戸藩の代表的儒学者であった藤田幽谷（一七七四～一八二六）と親交があった。文政二年（一八一九）没。

五代立胆胤謙　誰に師事して医術を学んだ等の記録は伝わらず不詳。妻は須賀川村須藤氏の女。長女よし子は氷之沢村（常陸大宮市）栗田宗輔に嫁ぐ。二男の胤誠は喜連川に皆吉家を再興し三男胤勝は長山三右衛門家を継ぐ。二女のはま子は上岡村菊池三郎左衛門武美に嫁ぎ初代大子町長となる武保を産む。三女けい子は婿を迎えて分家し皆吉丹治平家を起こす。天保十四年（一八四三）没。

六代友軒胤俊　立胆胤謙の長男。水戸藩医道玄楊に師事したのち江戸に出て将軍家奥医師辻元崧庵に学ぶ。友軒は医師として祖父立碩に劣らず高名であった。性温和でものに拘らず自らに厳しく人に優しく酒を愛したという。教授した子弟は数百人に上り「大子先生」と称されたと墓誌にある。明治十三年（一八八〇）没。

七代文（あきら）は友軒の長男。明治五年水戸藩医本間玄調の嫡子高佐に師事したのち、六年上京して佐々木東洋に学び、明治十一年に試験に合格して医師となった。本間玄調は原南陽・華岡青洲・シーボルトに医術を学んだ幕末水戸藩を代表する医師。佐々木は大学東校（東京大学前身）の教授や東京医学校病院長等を歴任し杏雲堂医院を開業し第二代東京府医師会長に就任している。

文は当初茨城病院の医局長兼茨城医学校教授として奉職したが、後に職を辞し医術研鑽のため上京、在京中の明治二十五年（一八九二）に四十四歳で死亡した。

後嗣の質（ただす）は大阪府の技官として体育衛生行政に携わりその子孫は今に繋がるが、皆吉氏の医家としての歴史は七代文を最後に絶えている。

（大子町大子在住）

新薬師如来石像を建立して

田澤一守

本誌第六十八号に「まぼろしの浅井戸　薬師井」と題して寄稿したことがある。大字山田と下金沢の字境にある薬師井（涌井）について、その後の顛末を紹介する。

この薬師井は、小さな谷津田の先端にあり、冬でもほとんど凍らず、手汲みでそのままでも飲める五平方メートル程の涌井であったと子供の頃に記憶している。昔からどれほどの人達に利用され、参拝されて地名が生まれたのか。字番地図には薬師沢と、土地図にも薬師脇と明記されている。現在、その周辺は牧野と化してしまい、既に痕跡は見当たらなくなってしまった。また、隣接する里山にあった薬師跡も、倒れた石碑が生い茂った雑木や篠に埋もれていた。

数年前、薬師跡の土地を譲ってくれた旧家を訪ね、当家の古老から薬師井や倒碑の由来を聞いてみたが、「薬師跡の平らな部分には萱を伸ばし屋根の材料にしていたが、薬師井や倒碑の由来は何も分からない」、とのことであった。薬師井は、まさに歴史から忘れ去られ、姿を消す寸前であった。

私たち夫婦も七十歳を越え、八十歳に近くになり、コロナ禍の時節、昔の神仏の加護を想い起こし、先人の残してくれた倒碑の復元と新たに薬師如来石像、その祠、供養塔を整備することを思い立ったのである。十二、四年程前にも一度、自宅墓所改修の折、供養の石碑を刻んでもらい、荒れた薬師跡を整備しようとしたが、この時は、薬師跡の手前を流れる小沢により石材が運搬できない事情があったため立ち消えとなり、それ以来長く考えていたことでもある。

今回の整備に当たり、事前に地元の建設会社の協力を得て、小沢にコンクリート製の大きなヒューム管を設置できた。これにより重機が通れる進入路を整備できたので、工事は順調に進んだ。

当時は、薬師井の霊徳にあやかり、そのお礼に石碑を背負い、それとも馬の背で運んだのだろうか。地ごしらえのため、薬師跡の平らな部分を刈り払いしてみると、お堂の礎石のような数個の置き石もはっきりと確認できた。こうして、令和四年一月十五日、念願の新薬師如来石像を建立でき、その際に、下金沢性徳寺住職による開眼供養法要も執り行っていただいた。

コロナ禍も少し落ち着き、平穏な日々が戻ってきた。自然なものに売薬のような効力を求め、先人により利用され守られてきた事実を後世までも伝えたいとの思いから、これらの建立の一年を記念して寄稿したものである。下金沢十二所神社並走の参道を北に向かって町道を東に折れ、東側の脇道に入れば薬師跡の里山が見えるので、ぜひご参拝いただきたい。

（大子町下金沢在住）

大理石の薬師如来石像（約 80cm）

左から供養塔、復元した石碑 2 基

「奥久慈胡瓜」の盛衰（下の一）

下重康男

東京オリンピックを境に昭和四十年代に入ると農村、農業は大きく変わろうとしていた。化学肥料や農薬の目覚ましい進歩、流通市場の大型化、機械化農業の進展、四十五年から本格化する米の生産調整等は農業のあり方に多大な影響を及ぼした。初めは京浜都市部の台所を担う目的で始まった奥久慈胡瓜の栽培は、高度経済成長の好況の波に乗って躍進し、昭和四十一年七月には国から野菜指定産地の指定を受け、名実ともに京浜市場を席巻することになる。ちなみに、隆盛期の奥久慈胡瓜の出荷状況は下段の表に示す通りである。

昭和四十二年、大子町は第一次農業構造改善事業三ヶ年計画を樹立し、上岡地区で大型圃場整備を開始した。施設園芸胡瓜作が初めて芦野倉に誕生したのも同じ年であった。市場で胡瓜が飛ぶように売れた昭和三十年代に対し、販売価格の伸び悩みや諸々の要因による奥久慈胡瓜の作付の減少など、微妙な変化の兆候が現れ始めたのもこの頃である。

奇しくも、筆者は昭和四十二年に大子町農協に奉職した。

筆者が体験した「胡瓜戦争」の一日を追ってみよう。生産者は、夜が明けると同時に収穫を開始し、共同選果場に搬入。胡瓜を選別し、荷づくりをする。正午迄に農協へ出荷数を連絡。出荷が終了すると、休む間もなく一葉一果の摘芯作業、病害虫を防除するための農薬散布等、夕方遅くまで働きづめであった。

他方、農協は、生産者からの出荷数を集計し、経済連東京事務所へ市場ごとの分荷の指示を求めると同時に集荷態勢を整え、集荷にあたる。運送店と配車手配を交渉し、東京事務所の分荷指示にしたがって等級別、市場別に大型トラックに五～六百箱を積載。トラックは次々と京浜市場に向けて出発する。内勤職員は、市場販売速報を受信し農家へ連絡、パソコンやスマホのある今時と違いあくまで算盤片手に全ての連絡事務や精算事務を行う。とにかく、農協は職員総動員で猫の手も借りたい状況が数十日続く。残業は常態化した。当時、国道一一八号線は砂利道で改良の途中であった。過酷な運送業務のなか、荷の市場到着は午前二時厳守。それは何故か、よいせり場を確保し好値を期待するからである。これが「胡瓜戦争」と呼ばれる所以（ゆえん）である。

先年に植えたりんご苗木が経済樹に成長し、換金できるようになる。以前のように胡瓜価格の優位性が望めなくなり、割合い堅調な蒟蒻や椎茸等に切りかえる傾向が顕著になってくる。その分胡瓜の作付けは減ることになった。

（大子町下野宮在住）

昭和 39 年産地区別奥久慈胡瓜出荷状況

地区	人員	面　積	出荷数量	販売金額
大子	166 人	10 町 9 反 3 畝	18,395 箱	5,793,865 円
依上	49 人	5 町 2 反 8 畝	8,714 箱	2,718,950 円
佐原	28 人	1 町 6 反 1 畝	1,193 箱	335,687 円
黒沢	128 人	8 町 4 反 6 畝	15,255 箱	4,229,599 円
宮川	102 人	7 町 2 反 3 畝	15,740 箱	5,413,062 円
生瀬	86 人	7 町 4 反 0 畝	17,279 箱	5,826,128 円
袋田	85 人	5 町 5 反 5 畝	11,044 箱	3,697,567 円
合計	644 人	46 町 4 反 6 畝	87,620 箱	28,014,858 円

注

(1)『農政だいご』第 14 号、昭和 40 年 1 月 1 日発行より引用。

(2) 昭和 39 年 11 月 4 日、大子町農協調べ。

(3) 販売金額は、市場手数料等を除いてある。

(4) 1 箱は 10 kg詰め。

(5) 上小川、下小川地区は当時農協支所が設置されていないため、本表に生産実績は計上されていない。

防除暦の作成とその役割（下の三）

―特産品・りんごのルーツを探る（二一）―

病害虫を防除しなければ、商品として売れるりんごは育たない。とくに大子町では。防除に際しての必須の三原則が適期、適薬、適量であり、それを具体化したものが「防除暦」であることは再三述べた通りである。本誌前号では、大子町の生産者が利用していた「防除暦」が七つの項目から構成されていることを紹介したが、本稿では、その一つ「防除法」（または「標準農薬」）と記されていた項目、つまり実際に用いられていた農薬そのものに焦点を当て、その実情と変化の様子を跡付けてみたい。

筆者の手元には、昭和四〇年度、四一年度、四二年度、四三年度、四四年度、四七年度の六年分の「防除暦」の写しがある。この四十年代前半から後半にかけての時期は、農薬そのもののあり方が厳しく問われ、農薬の法的枠組みや行政の向き合い方が大きく変わる、まさに転換期でもあった。そこでまず、農薬に関わる制度上の動きを簡単に振り返ることから始めよう。

昭和二三年（一九四八）七月に公布され、翌八月に施行されたのが農薬取締法である。戦後の食糧難のなか急務であった食糧増産を推進するために不良、粗悪な農薬を排除し、農薬の品質保持と向上を図ることを狙いとしていた。注目すべきは、初めて明文化された農薬登録制度である。同法第二条が、「製造業者又は輸入業者は、その製造し若しくは加工し、又は輸入した農薬について、農林大臣の登録を受けなければ、これを販売してはならない」と明記したように、すべての農薬の販売は厳しい規制下におかれることになった。いわば、無登録の農薬を販売することは違法とされたのである。しかも、登録の有効期間は三年とされ、三年ごとの登録更新手続きを怠ると登録は失効する仕組みがとられた。同年九月にはＤＤＴ、砒酸鉛等が殺虫剤として、硫酸亜鉛が殺菌剤として初めて登録された。また翌二四年には、有機塩素系殺虫剤として国内で最も大量に利用されたＢＨＣが登録されている。

こうして制度の骨格が整えられるなか、とくに昭和三十年代の高度経済成長を背景に農薬産業は拡大していく。農薬の生産量をみると、三三年の約一八万六千トンから四四年の約六八万二千トンへと三・八倍に膨らんだ。言い換えるなら、政府が打ち出す農業近代化政策のもとで、生産者たちは、防除効果が高く、生産拡大にも直結する農薬利用を加速化したことを意味している。しかし同時に、これは、農薬が及ぼす〝負の側面〟が顕在化する過程でもあった。例えば、農薬による中毒事故発生件数をみると、三二～三五年に死亡事故四五人、中毒事故六八一人、三六～四〇年には半減するもののそれぞれ三八人、三二二人を数えている。

多発する事故の一方、残留農薬の問題が新たに浮上する。農薬は、病害虫や雑草等の防除という当初の目的を果たしたあと直ちに分解して消えるわけではなく、作物や土壌に付着し、様々な経路を通して環境に残留し蓄積するという問題である。例えば昭和三一年には、厚生省公衆衛生局長から「りんごに残留する農薬の取扱について（通知）」が発出され、食品に残留する農薬量が初めて規制されることになった。また、玄米が有機水銀に汚染されている事態も判明した。厚生省は、人体への影響を調べるため全国規模での実態調査に取り組む。三九年、四〇年のことである。大子町では、最初の「防除暦」が作成されようとしていた。

参考文献　高野三郎・金子俊・泉敬子「農薬の歴史的変遷について」（『生活科学研究』第八号所収、一九八六年）
大田博樹「日本の農薬産業技術史（4）―農薬のルーツと歴史、過去・現在・未来―」（『植物防疫』第六八巻第一〇号所収、二〇一四年）

（齋藤典生）

注目を集める保内郷の「山の戦士」

―「いはらき」新聞に見る戦争時代の大子（5）―

山林資源に恵まれた保内郷は、近世以前から材木及び炭の供給地域として知られていました。とりわけ、八溝山麓を擁する黒沢村や生瀬村、上小川村では木炭が盛んに製造されてきました。

昭和十二年（一九三七）の日中戦争勃発以降、不足する軍需用ガソリンの代わりに木炭や薪が自動車用燃料として使用され、基本燃料としても重要な木炭の不足が深刻化することとなりました。そこで政府は増産を掲げ、茨城県内でも、県下有数の木炭生産地である保内郷を中心に急ピッチで増産が進められました。

こうした中、昭和十六年頃から、製炭業に従事する人を指す「山の戦士」という言葉が「いはらき」でも散見されるようになりました。日米開戦の頃より、木炭の増産に励む人々が、「山の戦士」として、メディア上でその姿が盛んに紹介されることとなります。

昭和十七年八月二十五日から二十六日には、黒沢村の「山の戦士」をテーマにした連載記事「奥八溝千古の秘境に木炭増産敢闘振を見る　胸打つ山の戦士の姿」が、朝刊、夕刊を含む三回にわたって掲載されました。これは、「いはらき」の記者が八溝山麓の「山の戦士」を訪問した際の取材記事で、人々がひたむきに増産に励む姿を伝えるものとなっています。

記事内容を見ていきます。

記者が大子営林署の八溝官行事業所に到着すると、山の娘から濃茶と一皿の砂糖をご馳走になりました。「山ではさほど甘いものは欲しくない」とためらいもなく砂糖を提供する娘の姿を、戦争に勝ち抜くための望ましいものとして紹介しています。さらに、山の中腹へと歩を進めると、そこには「国策燃料の増産に挺身する山の戦士」の姿がありました。辛いことや生活の不足について記者から尋ねられても、「格別ない」と答え、取り立てて不足を訴えない「山の戦士」の美徳を伝えています。この「山の戦士」の姿は「健康にして働く―といふのが製炭夫の信條の如く不足を不足と思はず甘受する、時局をハツキリと自覚してお国のためにご奉公する熱意」と表現されています。このような「飾り気のない」「山の戦士の健闘」を取り上げた記事は、「血と汗で焼いた貴い木炭だ、何んで感謝なくして消費出来よう、一本の炭でも節約してこの冬期に備へやう、消費者の理解と協力こそ山の戦士に應へる最大なる慰問の言葉だ」との言葉でまとめられています。

その一方で、山中生活の不足を補うため、「製炭夫のために古着・古洋服類を、その子弟のために絵本、雑誌類」を贈ることが試みられました（同年九月十五日号夕刊）。「純情可憐な」少年からも、大量の雑誌・絵本が届けられています（同年十月二十三日号夕刊）。

保内郷の重要産業であった製炭業に従事する人々は、戦時中の燃料不足の解消に尽力するとともに、戦時下での模範的な生活をする者たちとして、たびたび「いはらき」の紙面に登場することとなったのです。

（藤井達也）

編　集　大子町歴史資料調査研究会
編集人　齋藤　典生（大子町歴史資料調査研究員）
　　藤井　達也（大子町歴史資料調査研究員）
　　大金　祐介（大子町歴史資料調査研究員）
　　神長　　敏（大子町教育委員会事務局）
　　大金　真理子（大子町教育委員会事務局）
発　行　大子町教育委員会
　　久慈郡大子町大字池田二六六九番地
　　☎０２９５（７２）１１４８
発行日　二〇二三年（令和五）九月一日